赤ちゃんとつくった赤ちゃんのための絵本

『もいもい』はどのように生まれたのか

赤ちゃん絵本はカラフルでかわいらしい絵の作品が多い。そんななかで、不思議な絵が描かれた『もいもい』が人気だ。SNS上では「赤ちゃんが泣き止んだ」などの反響も多い。監修した開一夫さんに『もいもい』誕生の経緯を聞いた。

東京大学大学院総合文化研究科教授
開　一夫

●ひらき・かずお　1963年富山県生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程修了。工学博士。専門は赤ちゃん学、発達認知神経科学、機械学習。「東京大学赤ちゃんラボ」も運営。著書『赤ちゃんの不思議』（岩波新書）など。『もいもい』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）他、赤ちゃん学絵本シリーズを監修。

「赤ちゃんのための絵本」は本当か？

――〝赤ちゃんが選んだ絵本〟として大きな話題を呼んだ『もいもい』（市原淳／作、開一夫／監修　ディスカヴァー・トゥエンティワン）は、「赤ちゃん学」を専門とする開先生の発案で生まれたそうですね。なぜ赤ちゃんのための絵本をつくろうと思われたのですか？

私が専門にしている「赤ちゃん学」には、さまざまな分野の研究者が集まっています。その中で、私は赤ちゃんの脳機能や認知的能力、コミュニケーション能力の発達について研究しています。方法としては、実験室実験を中心に科学的に探求しています。

日本で「赤ちゃん学」が本格的に研究されるようになったのは二〇〇〇年くらいからで、研究分野としての歴史はそれほど長くありません。とはいえ二十年以上、研究者として研究を続けていると、赤ちゃんの「こころ」を知るノウハウも蓄積されていきます。そのノウハウを活用し、作成段階から赤ちゃんがかかわる何かをやってみたいと思ったのです。

――その「何か」として絵本を選ばれたわけですね。絵本にしたのには理由があるのですか？

オモチャの制作でもよかったのですけれど、オモチャだと、視覚・聴覚だけでなく、触覚や運動機能など複雑に絡み合った認知プロセスについて考えなければなりません。したがって、実験も複雑になってしまいます。

絵本の場合は、音と図柄（デザイン）に焦点を当てて赤ちゃんの反応を見るだけでも、かなりのことがわかるはずです。それが絵本を選んだ理由のひとつです。

もうひとつ、赤ちゃんは世の中にある絵本が本当にが好きなのかとの疑問がありました。

絵本の制作過程で赤ちゃんに参加してもらうという企画自体は十年以上前に思いついていたのです。当時から書店に並ぶ絵本を見て違和感を覚えていました。本の帯に「赤ちゃんが選んだ絵本」と書かれていても、実際に選んでいるのは親や祖父母といった大人です。選ぶ理由も、昔から売れている絵本だからとか、有名な絵本作家の作品だからとか、評判がいいからといった大人視点のものが多いように思います。

もちろんお財布を握っているのは大人ですから、実際に購入する人たちのお眼鏡にかなうものであることは大切なのですが、赤ちゃんが本当に好きなのかどうかはわかりません。

それに、絵本の作り手も大人なので、「こういうものが赤ちゃんは好きだろう」と赤ちゃんの気持ちになって、想像してつくるしかありません。なぜなら赤ちゃんは言葉が話せませんから。

――幼児になれば「好き」か「嫌い」かを言葉で伝えることはできるけれども、乳児は言葉でのコミュニケーションはできないので、本当はどうかがわからない。

大人が考える「好き」は、赤ちゃんにしてみると「嫌い」かもしれませんよね。でも、「赤ちゃん学」の方法を使えば赤ちゃんの気持ちを知

『もいもい』　市原淳／作、開一夫／監修　ディスカヴァー・トゥエンティワン